

30. さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。
31. そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい。」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。
32. そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。
33. ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。
34. イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであることを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。
35. そのうち、もう時刻もおそくなったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここはへんぴな所で、もう時刻もおそくなりました。
36. みんなを解散させてください。そして、近くの部落や村に行って何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください。」
37. すると、彼らに答えて言われた。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」そこで弟子たちは言った。「私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか。」
38. するとイエスは彼らに言われた。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて言った。「五つです。それと魚が二匹です。」
39. イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。
40. そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。
41. するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。
42. 人々はみな、食べて満腹した。
43. そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。
44. パンを食べたのは、男が五千人であった。

## 説教

イエスさまは、山に登り、そこで十二弟子を任命なさいます。それは、彼らを身近に置いてご自分から学ばせるためであり、同時に、彼らに福音を宣べさせ、悪霊を追い出す権威を持たせるためでした（マルコ 3:14-15）。彼らにそのような「権威」を与えたイエスさまがどのような方であるのか、どれほど権威ある方か、それは弟子たち任命の時に既にかなり明らかになっていましたが、それ以降も次々と明らかになっていきます。任命の前には、悪霊を追い出し、病人を癒やし、汚れをきよめ、人の罪を赦す、権威あるお方でした。任命の後には、嵐を静め、六千もの悪霊をまとめて退治し、さらには死人を生き返らせました。こうして、イエスさまの権威は、病と霊界、この大自然と天地万物、さらには死後の世界と死そのものにも君臨するものでした。

イエスさまの権威は、そのまま、イエスさまが弟子たち、すなわち教会に持たせた権威に関わるものでもありました。イエスさまと共に生活しながらイエスさまから学んだ弟子たちは、今度は実習ということで、二人ずつイエスさまのもとから遣わされます(6:7)。こうして、十二弟子は「悔い改めを説き広め、悪霊を多く追い出し、おおよぜいの病人に油を塗っていやした」のでした(12-13)。その伝道は大いに効果がありました。「イエスの名が知れ渡り」、時の権力者「ヘロデの王の耳にも入った」ほどでした。弟子たちの伝道はヘロデ王を震え上がらせます。弟子たちが伝えたイエスさまは、ヘロデが首をはねたバプテスマのヨハネの生き返りだと思ったからです(16)。

宣教から帰って来た弟子たちは、「自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告」します(30)。すると、イエスさまは「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行って、しばらく休みなさい。」と言われます(31)。「寂しいところ」という言葉は「荒野」とも訳すことができます。イエスさまご自身も、しばしば雑踏を避けて、静かに山や荒野で祈りました。休むことの必要性を、イエスさまはよくご存じでした。伝道がどんなにうまくいっても、目の前の現実を来る日も来る日も慌ただしく対処しているうち、いつしか自分も気づかぬままに霊的に貧しくなってしまうということもよくあるのです。事実、弟子たちの伝道の結果、忙しさは倍増します。それで、「人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかった」ほどでした(31)。

イエスさまに命じられて休もうとした弟子たちでしたが、群衆がそうはさせてくれません。結局、弟子たちが舟で向かう先に、彼らが着くより先に群衆が徒歩で駆けつけて待っていたのです。イエスさまは、その様子を見て、「彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみます(34)。「羊飼いのいない羊」とは、神のこぼれ、真理を教える教師がいないことを意味する旧約の表現です。ユダヤには政治的な指導者も霊的な指導者もいました。でも、人々は神を求めて霊的に飢え渴いていたのです。それで、イエスさまは「いろいろと教え始め」ます(34)。そのうち、時刻も遅くなります。それで、人々を解散させて「何か食べる者をめいめいで買うようにさせてください」と弟子たちはイエスさまに言います(35-36)。

すると、イエスさまはこう言います。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」これまで、人々に福音を伝え、悪霊を追い出し、病気をいやして来た弟子たちでしたが、今度は生きるのに必要な日毎の糧を「あなたがたで上げなさい」とイエスさまは命じるのです。彼らを食べさせるのは自分たちの責任外だと思ったか、弟子たちは反論します。「私たちが出かけに行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか。」(37)二百デナリは、おそらく彼らが持っていた全額であろうと考えられます。一デナリは一日分の賃金ですから二百デナリと言えば相当な額になるのですが、それでも、ここにいる人たちは男だけで五千人、女も含めると一万人は越えますので、確かに足りません。とは言え、一人あたりに換算すると少なくとも百円にはなりますので、ほんの少しは群衆の腹の足しになる物を提供できたかも知れません。ですから、弟子たちの言葉は、そんなことまでする必要があるのか、そんなことまでする責任は自分たちにはないという責任逃れではないかと思えます。でも、そう考えている弟子たちに、イエスさまは、ご自身が群衆のことをどう考え、心砕き、心配っているのかを知らせるために、「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」と命じられたのでした。一通り伝道実習を終えた弟子たちに、さらに一步踏み込んだ教育実習がなされています。

イエスさまは弟子たちに尋ねます。「パンはどれくらいありますか。行って、見て来なさい。」彼らは確かめて答えます。「五つです。それと魚が二匹です。」(38)。二百デナリどころか、五つのパンと二匹の魚では、ますます一万人の腹を満たすのは無理です。それでもかまわず、イエスさまは群衆をそれぞれ組にして青草の上に座させます。そして、イエスさまは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福します。そうして、パンを裂いて人々に配るよう弟子たちに与えます。二匹の魚も同様にみなに分けられました(41)。すると、不思議なことにパンも魚も増えに増えて、「人々はみな、満腹した」のでした(42)。のみならず、食べ残しのパン切れを集めると、「十

二のかごにいっぱい」になったのでした(43)。こうして、僅か五つのパンと二匹の魚でおよそ一万人が食べて満腹するという驚くべきイエスさまのみわざを見ることになります。

これが「寂しいところ」、すなわち荒野で起こった事実は、出エジプト後にイスラエルが天からの糧であるマナによって養われた奇跡を思い出させます。徒歩の男子だけで五十万人、それ以外にも含めると少なくとも百万人ものイスラエルの民が飢えないようにと、神は四十年の間、来る日も来る日も、欠かすことなく、日毎の糧を毎日与えて、彼らを養われました。その神の栄光をイエスさまはここであらわされたのです。「五つのパンと二匹の魚」を祝福し増やして一万人の腹を満たすこの奇跡は、無から有を生み出し、生きとし生けるすべてのものに日毎の糧を与えて生かし、何もない死の世界である荒野で百万人を養われたイスラエルの神、旧約の神のみわざです。すなわち、イエスさまは、ここで、ご自身がその神ご自身であると証ししておられるのです。神が、いのちを生み出し、養い、育て、守り、生かしておられるように、イエスさまもそうなさるのです。イエスさまは私たちの魂、霊に関心を払って、それを教えて、養ってくださるのみならず、私たちのからだ、健康、いのちにも特別な関心を払って、今日も生かしてくださっています。日毎の糧を与えて、今日も生かしてくださっているのです。そして、これが、ここでイエスさまが弟子たちに教えようとしておられるイエスさまの権威です。「日毎の糧」を与える、これは最も単純な表現ですが、考えてみると、決定的、かつ根源的な権威です。たとえ一国を支配するヘロデ王も、さらにはその上に君臨するローマ帝国の皇帝も総督も、「日毎の糧」を与えるお方によって養われているからです。そうでなければ、彼らとて飢え死にするしかありません。どんなに強く威張っている権力者も、実は「日毎の糧」の与え主なる神によって養われ、かろうじてどうにか今日も生かされているのです。そして、イエスさまはここで、ご自身が生きとし生けるすべての者、全人類に「日毎の糧」を与えて生かしておられる神ご自身であることを証しされました。イエスさまこそはいのちの根源なるお方なのです。イエスさまがすべての生き物を生かしておられます。ローマの皇帝も、ヘロデ大王も、アメリカの大統領も、日本の首相も、すべてこの方によって生かされています。イエスさまが今日も与える「日毎の糧」によって養われ、生かされているのです。イエスさまこそは、私たちのいのちを一手に握っておられます。すべての者はこの方によって生かされているのです。イエスさまこそは、これ以上ない最強の権威者です。

これまで、悪霊を追い出す、病気を癒やす、嵐を沈め、死人を生き返らせるイエスさまの権威を目の当たりに見てきた弟子たちでしたが、ここでは新たなイエスさまの権威を目撃します。それは「日毎の糧」を与えて私たちを生かしてくださっている神としての権威です。先には死人を生き返らせるイエスさまの権威を見て驚きましたが、そのイエスさまは同時に「日毎の糧」を与えて今日も私たちを生かしてくださっている方なのです。この奇跡には本当はもっと驚くべきです。死人を生き返らせるみわざは、ヤイロの娘ただ一人が受けた恵みでしたが、「日毎の糧」は、私たちも含めて全人類が受けている恵みです。愛です。神は、私たちを愛し、生かそうと意志し、生かそうと努力して、生かしてくださっています。そして、それほどの権威あるお方だからこそ、実は、悪霊を追い出し、病気を癒やし、といったこれまでの力あるみわざも成し遂げることができたのだと、弟子たちも私たちも悟らなければならないのでした。